

# car

280  
OCT  
2001

There is no life without car

## MAGAZINE

TOP ISSUE

### ファンタジーはいらない

設計者、パオロ・スタンツァーニが語る  
ランボルギーニとカウンタック

### 知られざる4座ロータスの世界

- LAMBORGHINI COUNTACH / PORSCHE 996
- LOTUS ELAN+2 / LOTUS ELITE
- LOTUS ECLAT / LOTUS EXCEL
- HONDA INTEGRA TYPE R
- RENAULT LUTÉCIA RS
- RENAULT TWINGO / CITROËN C5
- VAUXHALL VX220 / BMW 507
- JAGUAR XJ-6 / FORD GT40





PORSCHE 356 RACER

S65  
Classic Car Festival

RACING  
FIRST DEVELOPMENT

その日は外気温40度を優に超える暑さ。筑波サーキットのパドックにはアスファルトからの蒸気楼でゆらゆらと揺れて見える数多くのレーシングカー達が今や遅しと出走時間を待ち構えている。——日本クラシックカー協会(JCCA)が主催するクラシックカーサマーフェスティバルin筑波。例年では3月に行われる恒例の「筑波ミーティング」が今年は都合によりは7月に開催された。雲一つ無い青空もと、太陽は容赦無く照りつける。クルマにも人にも過酷な条件の中、どのような人間模様が垣間見れるのだろうか。

text:Yoshio-FUJIWARA (飯沼 義生) / Go-NAGATA (永田 郷)  
photo:Keizou-FURUKAWA (古久川 啓三)  
editorial-design:S-design (鈴木 誠二)

# 2001 Classic Car Summer Festival in TSUKUBA

## Accelerator

踏み続けるひと

# 「乗りづらさが魅力でね 356って奥が深いよほんとに」

井関純夫  
ポルシェ 356 SC



2007 Classic Car Summer Festival in TSUKUBA



ステアリングの奥に  
覗くスタックのメー  
ターや、ファイバ  
製のエンジンフード  
など現代的なチュー  
ニングパーツとクラ  
シカルなパーツとの  
上手い組み合わせ方  
はさすが。現代版ク  
ラシックレーサーの  
お手本と言えるクルマ  
です。

## Porsche 356 SC Sumio-Iseki

外気温計の針は40°C辺りでピタリと止まったまま。ここは筑波サーキットAパドック。29番ピットの脇でガラガラと照りつける陽の光を浴びながら、そのクルマは静かに行んでいた。

カーナンバー5。'64年型ポルシェ356SC。真っ赤なボディカラーに白のストライプが印象的だ。オーナーは井関純夫さん。インタビューを申し出ると、白いレーシングスーツに身を包んだ井関さんがピットの奥から現れた。

356カレラ2、904GTS、911R、934等々といった往年のレーシングポルシェを所有する井関さんは、13年間、この356でレースをしてきたという。若かりし頃、2輪でレースを始め、今にいたるまでレースを続けてきたという井関さんに、サンデー・レーサーとして今までサーキットに通い続けてきたその理由を訊ねてみた。

「その質問は難しいね。やはり、コレでいいっていうところまで来ていないからかな。奥が深い。クルマで遊ぶというモチベーションを持続するのも、こういう場所は必要だと思いますし。いまだにレース前日の夜はわくわくして寝つきが悪いですよ。そのあたりの新鮮な気持ちはいつまでたっても変わらない。今でもそんな気持ちになれるってところがレースの魅力じゃないかな」

このイベントについては、いかがですか？  
「JCCAはできるだけ参加するようにしています。レギュレーションや、一緒に走るクルマの種類な

ど一番気に入っているし。ちょうど僕が憧れたクルマたちがたくさん走ってるしね」

今回のJCCAではさまざまなクルマがエントリーするなか、356でのエントリーは井関さんののみ。その魅力はどんなところにあるのだろうか。

「乗りづらさがこのクルマの魅力でね。13年続けてきてもいまだに解決できない何かがあるというところが、このクルマでレースに出続けている理由かな。そもそも、完成度が非常に高いクルマだから、それ以上に持って行くのは難しいね。356は奥が深いよほんとに」

とはおっしゃるものの、井関さんが参加したS65レースで、356は1位2位を争う俊足ぶり。そのモデファイの内容は非常に深いものがありそうだ。「最初はね、とことん軽量化するところから始めたんですよ。RRだから、リアが重いでしょ。だからフロント以上にリア・セクションの軽量化に気を使ったな」

ロールケージが張り巡らされ、必要な物以外すべて取り除かれた内装を眺めながら、13年の月日を思い出すように井関さんは話を続ける。

「そりゃ、いろいろやっていくうちに速くはなりませんでしたよ。でもね、ただ速ければいいってもんでもないんですよ。筑波のタイムを縮めたいってだけなら、新しいクルマでも持ってくればそれで事足りる。でも、そこを古いクルマで走るってところに楽しみがあるんじゃないのかな」

今や、ヒストリックカーの中身を全て新しい物に換えて走るというスタイルも定着しつつあるなかで、ヒストリックカーをこよなく愛する井関さんは、ヒストリックカーのモデファイのポイントをどのように考えているのだろうか。

「そうだね、一番気を使うのが、その当時の雰囲気をもどって残していけるかということなんですよ。若かりし頃に憧れたあの当時の雰囲気を失わないように。このクルマの場合、フロントのウインカーレンズやサイドミラーは550スパイダー用を使っていますし、ステアリングホイールのホンボタンなんかにも当時の物を使っています。ホイールも、今ではもっと軽量化で作りのよいものがあるでしょうけれど、ポルシェ純正の6Jアロイを使用しているんです」

その当時の雰囲気をうまい具合に残しつつ、さらなる進化を続けて行くであろう井関さんの356。最後にこれからどのようなモデファイをしようかとお考えになっているのか質問してみた。

「いまだに奥があるからね。それをこれからも掘り下げていこうと思ってますよ。次に何をやるか？ そうだね。フロントの足をもう少し改善してみたいんですよ。それから、リアセクションの更なる軽量化を目指して、リアフェンダーをファイバーにでもしてみようかな。エンジン？それは秘密だよ」

そう言うと、井関さんはサングラスの奥にいたずらっ子のような笑みを浮かべていたのだった。